

## 背中

北海道寿都高等学校 一年 土本 翔大

がっしりとしていて、大きくて、どことなく安心感がある。僕はそんな父の背中が大好きだった。まだ僕が小学校にも入学していないような小さかった頃の話だ。父が仕事から帰ってきてから晩ご飯までの約一時間、仕事で疲れて寝ている父の背の中の上で寝る。それがまだ幼かった頃の僕の日課だった。大きくて、広くて、そして布団とはどこか違う温かさ。そういった父の温もりを感じながら大好きだった父の背中で寝ていたことを十年以上経った今もなお、鮮明に覚えている。

僕は幼い頃から体を動かして遊んだりすることが好きだった。そう言うよりも、一人で黙々と、絵を描いたり、絵本を読んだりすることがあまり好きではなかったから必然的に遊びといえれば体を動かすこと、というようになっていた様な気がする。そんな影響もあり、小学校では野球部に入ることにした。野球を始めたばかりの頃は、何もかもわからなかった。打ってから三塁の方向に走りだすくらい、野球に関しての知識は皆無だった。学校の授業の後に部活をして、その部活の後に、父とボールが見えなくなるまでマンツーマンの居残り練習をした。そして家に帰ってからは学校の勉強に加えて野球のルールの勉強もしていた。一日の四分の一を野球のことに使う生活に、まだ小学校低学年の僕は、泣きべそをかきながら練習したり、音を上げたりした。だが、不思議と野球をやめようと考えたことは一度もなかった。先輩達のように上手に出来なかったり、試合に出られなかったりと、落ちこぶこともたくさんあったが、毎日毎日ただがおしゃらにバットを振っていた。試合に出られなくても、周りの友達といっしょに野球することが楽しかったのだ。しかし、ある時を境に野球をすることが苦となっていった。

きっかけは本格的に試合に出はじめた小学校五年生頃のこと。僕は、試合でミスをしてしまった。そのミスがきっかけで、チームは負けてしまった。チームメイトは「気にすることはない。」と言ってくれた。だが、試合後に父に言われた言葉が耳に残った。

「あそこでミスをしたのはお前の練習が足りないからだ。」と。その言葉が、僕には十分すぎるほどこたえた。それから、もともと厳格だった父が、さらに厳しくな

ったように当時の僕は感じた。ミスへの自責の思いに追いつちをかけるような父に、僕は少しずつ反抗していくようになっていった。

そこからは苦勞の連続だった。自分が活躍したいという思いよりも、「またミスして怒られるのはいやだ。」という思いのほうが強くなっていった。ミスを恐れ、消極的になり、積極性がないと怒られる。負の連鎖だ。だんだんと自主練習をさぼりがちになり、ついには、父が練習を見にこない日は、練習をさぼるということまでしていた。とにかくその時期は、行きたくなかったのだ。そんなある日、テレビで甲子園を見ていると、父が、「あの時はミスしたことじゃなく、お前の取り組む姿勢に怒ったんだ。」と言った。

ハツとした。確かにあの時は、試合に出ていることに満足して、真剣に野球に取り組んでいなかった。だから、「父は、僕のやる気を引き出すために言ったのか。」と思った。そのことに気づいてからは、真剣に取り組む、試合でも活躍し、中学に入ってから、硬式のクラブチームで野球をやった。大会で良い成績をあげ、父からもほめられることが多くなっていった。三年になり、進路も大まかに決まり、これから高校に向けて頑張っていこうとした。だがその矢先だった。父が、亡くなったのは。父の訃報を聞いた時は頭が真っ白になった。

「これからだ、やっと今までの恩返しができる。」と思った矢先の出来事に、悲しみよりも将来への不安感のほうが勝った。今までの野球への原動力はまぎれもなく父だ。父のために野球をやっていたと言ってもいい。その原動力を失い野球をやめようとしたが、やはり、僕は野球が好きだ。そして、野球と同じくらい好きだった父も野球をやめることは絶対に望まないだろうと考え、僕は野球を続けることに決めた。

息子は父親の背中を見て育つと言うが、まったくその通りだと思う。僕は、あの父の背中にあこがれている。その僕があこがれた父の背中を、自分の子供達にも見せてあげられるように生きていこうと思った。そして、来世でも、僕があこがれた、あの、がっしりしていて、大きくて、どこことなく安心感のある大好きな父の背中で、またゆっくりと昼寝でもしたいものだ。